

## 「日本など眼中になし」

渡邊 昭夫

今年の6月、東京都内で開かれた防衛問題に関する或る研究会でのことである。討論の時間に、一人の若い人が挙手をして、発言を求めた。名と所属を簡単にのべたが、詳しくは忘れた。ともかく、中国から一時来日して何処かの研究所に身を置いているとのことであった。大変流暢な日本語で、開口一番「我々は日本など眼中にない」と言ってのけ、滔々と自説を展開した。要するに、中国が相手にしているのは、アメリカであって、日本などは目じやないということらしかった。新防衛大綱で動的防衛力とか、動的抑止力とか、武器輸出3原則の見直しとか（この最後のものが、当日の研究会のテーマであった）盛んに議論しているようだが、日本が今更ジタバタしても我が国に到底敵わない云々と言うわけである。今の中国が相手にしているのがアメリカだということは、従来からの私の観測であったので、それには別に驚かなかったが、数十人の日本の防衛専門家の前で、居丈高にぶち上げるその言い方には、正直驚いた。中国の軍事や外交専門家の見方を彼の言が代表しているのかどうかは知らないが、彼の国許で、politically correct（これは無論アメリカ流の言い方だが）でなければ、公の場で、そういう発言は出来ないだろうから、その意味では、これが、今の中国の考え方だと言って良かろう。米ソ冷戦の盛時、両国間の相互の相手に対する認識を評して mirror image とやった人がいる。アメリカの中国への見方も、ちょうど先の中国人研究者のアメリカ観の裏返しなのかも知れない。周知の anti-access, area denial をめぐる様々な動きが、こうした米中関係のなかで起こっているのは言う迄もない。しかし、それについて私が何か言うのは、まさに釈迦に説法だから、止めて置く。日本が今後どういう行き方をするのかの戦略は、こうした米中関係の大枠の中でしかあり得ないことだけをここでは指摘すれば足りる。

ところで、日本など眼中になしと称して、中国は、アメリカを相手にどうしようというのだろうか？「アメリカとの間に受け入れ可能な関係を確立することは、容易ではないだろうし、単独でできるものでもあるまい。新しい多極世界が現われつつあるとはいえ、アメリカは予見しうる限り、これからも最も強力であるばかりでなく、主導的な立場にある国家として存在し続けるであろう

う。・・・このような状況に適応すること——要はアメリカの指導性を認めることは、[☆☆☆☆]では忌み嫌われ続けている」。これは、実は、中国について書かれた文章からの引用ではない。わざと伏せ字にした☆☆☆☆に入るのは、モスクワの四字である（ドミートリー・トレニン著、河東哲夫、湯浅剛、小泉悠訳『ロシア新戦略 - ユーラシアの大変動を読み解く』作品社、2012年、395ページ）。

これに続くページでトレニンは、ロシアにとって可能な戦略はどういうものかについて、興味深い議論を展開している。その先は、読者各位がトレニンの本を手にとってお読みいただくとして、我々のテーマである中国に話を戻そう。

北京は無論モスクワとは違う。一旦挑戦して敗退し、崩壊した帝国を引き継いだロシアと違って、今の中国はダイナミックな発展を続けている大国である。おそらく時は我に味方していると見ているのだろう。だとすれば、没落した帝国の遺産を引き継ぎながら、新しい場所を世界の中で発見しようと苦闘しているロシア以上に、アメリカの指導性を認め、アメリカとの間に受け入れ可能な関係を確立することは、容易ではないだろう。しかも、日本を始め、近隣諸国など眼中になしと、単独でアメリカとの間に受け入れ可能な関係を作りだすことはほぼ不可能と言わざるを得ない。かつて日露戦勝後の日本に対する国際的世論が一転して日本に厳しい方向に変わって行くのを憂えて朝河貫一は『日本の禍機』（講談社学術文庫）を書いて日本人に警鐘を鳴らしたが、「日本など眼中になし」と豪語する人々が増えてゆく中国に対して『中国の禍機』を説き聞かせる有識の人は何処にありや？